I love you from Brain

I Love you from Brain

#1 Birds 3

#2 Please call my name only once 7

#3 You never say "father" 15

#4 I want you to hate me 25

#5 Masks 33

#2 Please call my name only once

昼下がりの柔らかい日差しをいっぱいに受けて、彼女の瞳は薄茶に透けている。こちらからその目の色の変化を見ていると、かなりまぶしそうに思えるのだが、彼女は目を細めることなく、備え付けられた丸イスに腰かけんとする僕を目で追っている。さて、僕は座るべきところに落ち着いて、彼女の方に目線をやる。それによって、僕と彼女の視線は合うはずなのだが、僕が彼女の瞳の光の透け具合や光彩の色の濃いところの模様までじっくりと眺めても、彼女の視線にぶつかって気まずい思いをすることもない。彼女の目を観察している僕には、彼女がどの辺りに目線をやっているかも、もちろん瞭然だ。彼女の目線は僕の顔から微妙に逸らされて、僕の肩口のその向こう、というような曖昧なところでさまよっている。

目を逸らされている、という不快感はない。けれど、こうして向き合っていても、彼女と視線が交わることは決してない。僕の肩を通り越して、その斜め後ろ辺りを、まじまじと見つめている。重ねて言うが、それを不快に感じることはない。むしろ、控えめで好ましいとすら僕は思ってしまう。それが、僕の秘めたる彼女への好意がもたらす作用なのかどうなのかは、分からない。

でも、僕が知る限りでは、とても限定された僕と彼女との共通の知り合いの意見に依るのだけれども、彼女の人付き合いにおける態度は、むしろ僕なんかよりも評価が高いくらいだ。曰く、気配りが利く、思いやりがある、物腰が柔らかい、そんな陳腐な言葉で彼女を形容することを僕自身は避けるが、結論として、彼女が他人と目を合わせようとしない、人当たりが悪い、おどおどしている、そんな人間ではないということだ。

ただ僕が彼女にたった一つ不満を感じるとするならば、それが僕から彼女への好意を阻害するような瑕にはもちろんなり得ないが、彼女が僕の名前をたった一度でも、呼んでくれればいいのに。

「今回は災難だったね。まだどこか痛む？」

「いいえ、もう随分良いの。しばらくギプスは取れないけれど」

そう言って、彼女は柔らかくほほえんだ。僕もそれに少しほほえみ返して、ベッドに横たわった彼女の、足下の方に目をやった。白い薄掛けが、くるみ込まれた彼女の細いからだの線にあわせて膨らみ、そのなだらかなシルエット

は彼女の左足に当たる部分でその調和を欠いていた。他の部分より明らかに太く、それこそが彼女の言うギブスであり、彼女のからだに今回の事故が残した、傷であった。

彼女が交通事故にあった、という話は、仲間内にすぐに広まった。皆が心配そうな顔つきで、彼女が車に接触したこと、中空に高く放り上げられたこと、何メートルも撥ね飛ばされたこと、硬いアスファルトに叩きつけられたこと、ぐんにゃりと投げ出されたからだは足が妙な方に曲がってしまっていたこと、などを積極的に情報開示しあった。僕は、その輪の中から外れて、ただその痛ましい話を一方的に耳に入れられていた。誰かが、お見舞いに行った方がいいかな、と気を利かせた風なことを言った。けれど、それが実行に移されない、口先だけの気遣いであることは、僕には分かりきったことだった。僕は違う。

「色々検査をしたけれど、問題はないようだし、後はこの骨がくっつけば元通りよ。それも、折れ方が複雑でなかったから、こうして固定しておけばいいんですって」

そう言う彼女の言葉に、僕は心の底から安堵する。顔色も健康そうだ。そのせいで、ますますギブスで固められた左足が痛々しい。今、彼女の目線はシーツの上に置かれた彼女自身の指の上に合っている。指先が触れ合うくらいに軽く合わせられた、細い指と指。

「ひどくぶつけられたと聞いていたから心配していたんだけど、それならよかった」

僕がそう言うと、彼女はふっと顔を上げた。そのまま、僕の目に視線が止まるかと抱いた淡い期待は実らず、やはり彼女は僕より少し後ろの空間に笑いかけた。晴れやかな笑顔だった。事故の時に負ったはずの痛みも、病院に留め置かれてあちこち検査される面倒さも、これからしばらく続く松葉杖の生活の不便さも、少しも混じらないきれいな笑み。

「ありがとう、お見舞いに来てくれて」

そのまま、その声で名前を呼んではくれないかと、僕は考えてしまう。叶うはずがないのに。なにしろ、彼女は誰かの名前を呼んだことがない。僕の知る限りでは。一度も、誰の名前も、例外なく。彼女の、他人に合わせない視線と同じように、誰も気にしてすらいないようだが、会話は、いい加減なものでそれで成り立ってしまうから、彼女の、

気配りが利く、思いやりがある、物腰が柔らかい、という印象を変えてしまったりはしない。けれど、注意深く彼女の言葉を追ってさえいれば、歴然とした事実だ。彼女は人の名前を決して呼ばない。

彼女は、決して相手と顔を合わせ、目を見て話そうとしない。決して相手の名前を呼ぼうとしない。けれど、僕の好意はいささかも揺らがない。それがむしろ魅力的であるとか、心にもない言葉でごまかそうとは僕は思わないし、こうして改めて見ると困った癖なのかもしれないが、それが彼女の人格を損なうようなことは事実ないのだから。

やはり、彼女は「ありがとう」の後に僕の名前を呼ぶことなく、彼女の視線は僕の肩口の辺りに当てられている。だから僕は、心ゆくまで彼女の光を透かした薄茶の瞳を覗き込みながら、元気な顔が見られて僕も嬉しいよ、と応じた。

彼女の怪我の経過を確認した後、彼女が、彼女の欠けた最近の周りの様子を聞きたがったので、若干不本意ながらも、皆が心配しているとか、もろもろの進捗具合とか、脱線したあげくの小話とか、そういった話をした。彼女は面白そうに聞いてくれたが、その様子からはやはり連中が彼女を見舞った事実はなさそうだった。あの口先だけの心配に腹が立って仕方がない一方で、ひとり見舞いに来た優越感のようなものが頭をもたげてきて、口を歪めそうになるが、彼女に悟られないように押し殺した。彼女は相槌を打つばかりで、あまり自分からは話そうとはしなかった。だから、その様子からだけ判断すると、彼女は事故に遭ってから、たった一人でこうやって病室にいたのではないかとすら思えた。もちろん、それは僕の妄想にすぎない。少なくとも、家族が来てくれたのだろう。わざわざ僕に話すことでもない。

彼女を前にして、表面上は何でもないようにしているが、その実、僕は舞い上がっているのだ。こうして彼女と二人きりでいるなどという状況で、冷静でいられる方がおかしいと僕は思う。その状況を作ったのが、彼女が交通事故に遭うという、素直に喜べない理由であることはもちろん承知なのだが、僕はそれでも嬉しくてたまらないのを偽ることができない。興奮しているせいで、余計なことまで思考を巡らせてしまうのだ。それは暴走した論理に依るものだと、もちろん分かっている。僕はただ、一人きりで彼女を見舞い、その結果彼女と二人きりになれたこの状況に、

心の底から礼を言いたいだけなのだ。そして今だけで良いから一人で噛み締めていたいのだ。

僕は彼女のことを、何も知らないと言っていいほど知らない。彼女の言葉の端々や立ち居ふるまいの軌跡を丁寧に拾っても、見えてくるのはいくつもないのだった。彼女独特の、分け隔てのない他人への接し方が見事なものであるとか、それくらいなものだ。そうでなく、僕が知りたいのは、彼女のもっと私的なことがらだ。ほんのささいなことでいい、むしろ、ささいであればささいであるほど嬉しい。彼女の内をほんの少しのぞき込めたようだし、何か秘めごとを共有したようで、胸が高鳴る。しかし残念なことに、そういったことは、不思議なくらい、彼女から染み出てはこない。こうして、向き合って座っている今まさにこの瞬間さえ。だから、少し、もどかしいのは確かだ。いや、余計に狂おしいのかもしれない。

いったい、彼女は僕のことをどう思っているのだろう。僕は彼女にとっての何なのか、と言い換えてもいい。僕は、彼女にとってかけがえのない、特別な存在になることを結局は望んでいるのだけど、もちろんまだまだ及ばないのは承知している。今までの積み重ねの分量は悲しいほどたかがしれていて、残りの道のりにはめまいが起こるほどだが、焦る必要はないのだから。ただ、僕の個人的な願望としては、彼女の気になる存在くらいにはと、欲張ったことを思う。いてもいなくても構わない、頭数合わせのために代替可能な端役であるというなら、勝手ではあるが、まるで見捨てられたようで落ち込んでしまう。

いずれにせよ、真実は彼女のどこからも読み取れない。彼女の笑顔は一点の曇りもそつもなく、そしていやみもない。相手が僕であっても、僕でなくても。僕とふたりきりでも、他の誰かがいても。誰に対しても、誰がいても。いつも同じだ、いつも彼女を見ていた僕には分かる。それを、仮面のような、などという侮辱的な言葉を、心ない馬鹿が物知り顔で評するのならば、彼女に代わり、僕がそれを許しはしない。彼女はそんな風に他人を欺いたりはしない。もちろん、彼女と一度でも関われば、そんなねぼけたことを言う恐れは、消えてなくなってしまうのだが。

頭の中は、まるでコップの中の嵐のようなありさまで、いけないと思いつつも、常ならぬ高揚のせいで転がりすぎてしまう。しかし、果たせるかな、僕と彼女の会話は途切れることなく全く良い調子で進んでいた。あふれんばかり

の期待も、願望も、僕はまだ秘めたままでいる。今は、まだこれだけでいい。彼女が、他愛のない、二人にとってはどうでもいいようなことがらの話でも、楽しんでくれるなら。彼女に楽しい時間が提供できるなら。今の僕には、それが精一杯だから。

ずっと彼女と向かい合ったままでいるせいで、差し込む日差しが僕の背中をじりじりと熱している。彼女の顔が、その中の瞳が、相変わらず日光にさらされて、薄く色を透かせている。いい加減、こんなに日に照らされて、彼女はまぶしくはないものだろうか。彼女の、明るく透けた瞳を見たときから、そんな心配がないでもなかったのだが、一度もまぶしそうな様子を見せないものだから油断していた。しかし、背中に感じる熱からするに、こんな日差しが直接目に差し込んでいるようでは困るだろう。目にだって悪いし、僕の顔などまともに見えないのではないだろうか。僕は、話の切れ目を見計らって、提案を会話に差し込んだ。

「ところで、今日は随分晴れているね。まぶしいんじゃない？　カーテンを閉めるよ」

そう言って、僕は腰を上げかけた、が彼女がそれを遮った。

「いいの。大丈夫、まぶしくないわ。カーテンは閉めないで」

声の調子はいつも通り柔らかだったが、珍しく言い方が強かったので、僕は驚いて、イスに座り直す前、そのまま腰を半分ほど浮かせたような状態のまま訊き返した。

「ごめん、迷惑だったかな」

僕の声にはよっぽど面食らった響きが混ざっていたのか、彼女は人を安心させるように笑みを浮かべ、謝った。そのほほえみが僕の目に真っ直ぐに入ってきたとしたら、僕は彼女の言葉も禄に耳に入らないまま、いいんだ、全然構わないんだよと優しく首を振っただろう。しかしながら、やはり彼女の視線は僕の目から外れて、軽く絡めて握られた指に落ちていたので、僕は彼女の申し訳なさそうな声を聞き逃すことようなはなかった。目線が落ちていたのは、ばつの悪さで目を伏せていたのかもしれない、と僕は彼女のことがよりいっそう、いとおしくなる。

「本当に、まぶしくないの。大丈夫よ。ごめんなさい、心配してくれたのに」

絡められた彼女の細い指が、そわそわとかすかに動いている。自分の言い方が随分ひどかったのではないかと、気に病んでいるようだ。彼女と僕の視線を受けて、もじもじしているようにも見える。ああ、本当にたまらなく、彼女に魅せられてしまうのはこんなときだ。胸一杯の甘美さを噛み締めながら、僕は今度こそ、優しく、構わないんだと首を振った。

「まぶしくないならいいんだ。ごめん、余計に気を回して、逆に気を遣わせちゃったね。入院のお見舞いに来ているのは僕の方なのに、本当にごめん」

いいえ、と彼女も首を振った。彼女の目は、日に透けて薄い色にきらめいている。どこか、僕でないところを見つめている。

「たくさん心配してもらって、私がお礼を言わなきゃいけないもの。何度もお見舞いに来てくれて、本当にありがとう」

「え？」

彼女のその言葉に、僕の口からは勝手に声がこぼれ出た。何かのスイッチがぱちっと落ちてしまったかのように、全ての動きが止まる。空調の微風に揺れる、彼女の髪の毛の先の、かすかな動きも。いつの間にかそろえて重ねられた、彼女の指先も。僕の背中に降りかかる日差しの温度も。頭の中は、白く空っぽになった。

そして、今まで信じてきていた、彼女についての事柄が、ぱらぱらとひび割れて、砕けていくような気がした。

まさか。まさか彼女は。認めたくない結論が、僕の頭を占拠していく。そうだ。

彼女は決して、僕の名前を呼んでくれない。

I love you from Brain

発行　2012 年 5 月 5 日
作成　独蛙…http://deform.y7.net/lonelyfrog/
井中蛙
…#1，#3，#5
…http://runoverkawazu.web.fc2.com/
津和野ヒトリ
…#2，#4
…http://deform.y7.net/
装丁　井中蛙
印刷　ポプルス